様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５３４

研究課題名（和文）サンドとスタール夫人における音楽と旅：フランス革命とどう向き合うか？

研究課題名（英文）Music and travel in the writings of G. Sand and Madame de Stael : How did they approach the French revolution?

研究代表者
坂本　千代（Sakamoto, Chiyo）

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：８０１７０６１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ジョルジュ・サンドとスタール夫人に関する研究の継続として、スタール夫人の回想録、彼女とサンドの18世紀から19世紀初頭を舞台にした作品中で、内容にフランス革命が関連するものを詳しく検討することによって、音楽、旅、革命（およびそれと関連する戦争、フリーメイソンの活動など）がそれぞれどのように結び付けられているかを、歴史的なパースペクティブおよびジェンダー論的な視点から明らかにした。申請者は3年の期間中にサンドに関する論文2本、スタール夫人に関する論文2本、学会発表1回、およびシンポジウムでの発表1回を行った。初期の目的を十分達成したと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は音楽と旅の両方をサンドとスタール夫人の性と国家を越える試みととらえ、さらにそれらとフランス革命との関係を中心課題に据えたユニークなものであった。研究成果である論文と学会発表は、ロマン主義研究の今後の研究で、19世紀ヨーロッパの精神風土に関する新たな知見を付け加えた。また、論文中の土地・住民・音楽の結びつきに関する考察、音楽とフリーメイソンとフランス革命の関係に関する考察等は「観光」や「音楽」というもののあらたなとらえ方を示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：Continuing my previous research, I examined George Sand's novels "La Comtesse de Rudolstadt" and "Nanon", as well as Madame Stael's novel "Delphine" and her memoir "Dix annees d'exil". The purpose of this research was to clarify the relationships between music, travel and the French revolution in these writings from historical and gender perspectives. Between April 2016 to March 2019, I published two articles on Sand, two articles on Madame de Stael, and made two oral presentations.

研究分野：フランス文学

キーワード：ジョルジュ・サンド　スタール夫人

１．研究開始当初の背景

申請者は平成 25－27 年度科学研究費補助金による基盤研究 C「サンドとスタール夫人における音楽と旅：性と国境を越える試みに関する研究」において、サンドの『旅人の手紙』と『歌姫コンシュエロ』、スタール夫人の『コリンヌ』の中の音楽や旅による国家とジェンダーの越境について考察するうち、これらの越境行為の連鎖が多くの場合、なんらかの形でフランス革命およびその記憶と関係があることに気づいた。そこで、本研究では、前回の研究成果を引き継いで発展させるべく「サンドとスタール夫人における音楽と旅：フランス革命とどう向き合うか？」という題目を設定した。

２．研究の目的

音楽をはじめとする芸術や旅に触発されて、人は一種の非日常的世界を体験することができる。その新しい世界においてイマジネーションの力は「思い込み」や「慣習」や「常識」の枠を踏み越え、それまであたりまえだと思われていた様々な境界を軽々と越えてその勢力範囲を広げることができる。だからこそ人は旅をし、音楽を聴くのであるが、サンドとスタール夫人の場合、イマジネーションによるこれらの慣習的あるいは常識的な日常性の破壊、それまで何の疑いも抱かなかった古い事物を捨て去ることは､「革命」の観念を呼び起こすことにもなった。スタール夫人の回想録や、彼女とサンドの 18 世紀から 19 世紀初頭を舞台にした作品中で、内容にフランス革命が関連するものを詳しく検討することによって、音楽、旅、革命（およびそれと関連する戦争、フリーメイソンの活動など）がそれぞれどのように結び付けられているかを、歴史的なパースペクティブおよびジェンダー論的な視点から明らかにすることが目的であった。

３．研究の方法

(1)サンドに関して

①女性ロマン主義者はどのようにして音楽と旅と革命を結び付けたか？

18 世紀半ばのヨーロッパを舞台とする長編小説『ルードルシュタット伯爵夫人』(1843-1844)を主に取り上げて考察した。

②ロマン主義終焉期の女性作家は革命をどのように描いたか？

1804 年生まれのサンドが 1871 年のパリ・コミューン直後の時期に発表した農民小説『ナノン』(1872)を主に取り上げて考察した。

(2)スタール夫人に関して

①ナポレオンとの葛藤

作者とナポレオンとの不仲を決定的にした長編小説『デルフィーヌ』(1802)を主に取り上げて考察した。

②亡命の旅と革命はイマジネーションをどのように活性化させたか？

未完の旅日記（死後出版）『追放 10 年』(1820)を主に取り上げて考察した。

(3)19 世紀文学、ロマン主義および女性作家について

本研究の研究協力者であるマルティーヌ・リード氏（リール大学教授）および高岡尚子氏（奈良女子大学教授）と緊密に連絡を取って情報交換、討論等をおこなったのち、リード氏を日本に招へいして講演会・研究会・勉強会などをおこなった。

４．研究成果

(1)主な成果

①1789 年のフランス革命とそれに至るまでの 18 世紀をどうとらえるかということは 19 世紀フランスの知識人たちにとって大きな課題であった。サンドは革命時代を生き抜いた祖母や母からその体験を聞き、また作家となってからは、筋金入りの共和主義者である恋人ミシェル・ド・ブールジュのジャコバン的革命観に接していた。1843 年から 44 年にかけて出版されたサンドの『ルードルシュタット伯爵夫人』は 18 世紀半ばのヨーロッパを舞台に、音楽、旅、秘密結社が重要な役割を果たしている。申請者は論文「サンド『ルードルシュタット伯爵夫人』における秘密結社とフランス革命」を刊行して、主としてこの小説の最後の部分を占める秘密結社の本拠でのエピソード、「エピローグ」および「フィロンからイグナス・ジョゼフ・マルチノヴィッチへの手紙」を詳しく検討した結果を示した。サンドの創作した秘密結社「見えざる者たち」がこの作品中でいかなる役割を担っているかという点や、実在のフリーメイソンやイルミナティと「見えざる者たち」との共通点・相違点を考察し、作品中で音楽、旅、秘密結社及び革命がどのように結び付けられ、やがて起きるはずのフランス革命がどのように描かれているかを、当時のサンドに大きな影響を与えた社会思想家ピエール・ルルーの影響とともに明らかにした。

②サンドの小説『ナノン』は 1872 年に出版された、作者の最晩年の作品であり、フランス革命を取り上げた歴史小説である。申請者は論文「ジョルジュ・サンドの『ナノン』における旅と革命」を刊行して、この小説を検討した。『ナノン』が出たのが 1872 年であるという

ことからわかるように、この作品は 1870 年から翌年にかけての普仏戦争、第二帝政崩壊、パリ・コミューンによって、フランスとフランス国民が動揺し、不安、絶望、希望などの間を人心が揺れ動いた時期の直後に執筆されたものである。故郷のベリー地方ノアンで暮らすサンドがその時代の大混乱の中で戦争、新しい共和制、パリにおける反乱、新政府の政治家などをつぶさに観察したあとで、80 年ほど前のクルーズ地方（ベリーの隣）の人々の見た革命、共和制、恐怖政治、戦争などについて描いたものである。この小説では主人公ナノン（クルーズ地方の貧農の娘）の一人称で彼女の子ども時代からおとなになるまでの出来事が物語られている。1775 年生まれのナノンは 18 歳の時に生まれてはじめて村を出て、都市（リモージュ）に向かう。幼なじみの、愛するエミリアンの命を救うために、裸足で街道に出た彼女はリモージュからベリー地方のシャトールーへ、そしてクルヴァンの森の中での逃亡生活を経て、数か月後に村に戻る。申請者の論文ではこの旅に特に着目し、「女主人公の旅」「所有と金銭」「フランスと愛国心」という観点から、パリ・コミューン後のサンドのフランス革命観や社会観を明らかにした。

③スタール夫人の最初の長編小説『デルフィーヌ』（初版は 1802 年刊）にはさまざまな女性の生き方と彼女らの運命が描かれている。一見、物語中の時代（1790 年代の初め）の政治・社会情勢とも作品刊行の時代（1800 年代初頭）ともあまり関係のない、フランス貴族階級の女性たちの生きざまのようである。だが、当時の終身摂政ナポレオン・ボナパルトはこの小説を不穏当なものとみなし、作者をパリから追放した。そのいきさつについて申請者は論文「スタール夫人の『デルフィーヌ』について」で考察し、また、『デルフィーヌ』の結末の２つのヴァージョンを比較検討した。スタール夫人存命中に新しい結末が執筆されたにもかかわらず出版されなかったのであるが、その理由として、作品中の革命観の展開や、自由に対する圧迫についての糾弾では最初のヴァージョンのほうが迫力があり、ナポレオンから迫害を受けて亡命せざるを得なかった作者の怒りが最初の結末をそのまま残させたのではないかという結論を出した。

④ナポレオンからの迫害を逃れて亡命の旅に出たスタール夫人は 1812 年夏にロシアの首都サンクト・ペテルブルクに滞在した。彼女はそこでロシア人たちに歓迎され、皇帝夫妻はもちろん宮廷や軍の高官など当時の最上流階級の人々と交流した。そのさいに彼女は詳しいメモを取ってその時の印象や考察を書き残し、のちにそれを回想録『追放 10 年』（未完、死後出版）に取り込んだのであった。申請者は論文「ナリシキン邸のスタール夫人」において、サンクト・ペテルブルク滞在中のエピソード、ロシア貴族ナリシキンの館訪問を取り上げ、そこに見られる彼女のロシア帝国観、ナポレオンのイメージ、ロシア音楽についての言及を分析して、旅というものの一種の究極の「負の形態」ともいうべき「追放の旅」についての考察をおこなった。

⑤18 世紀プロイセンの実在の軍人フォン・デア・トレンク男爵について、「『コンシュエロ』『ルードルシュタット伯爵夫人』とフリードリヒ・フォン・デア・トレンク」という題名の研究発表をおこなった。日本ではほとんど知られていないこの人物について、その生涯を解説したのち、サンドの 2 つの小説中でのこの人物の描かれ方を検討し、フォン・デア・トレンクの『回想録』とサンド作品との共通点について、「牢獄」「脱獄」「秘密結社」「徒歩の旅」「フリードリヒ大王とマリア・テレジア女帝」「遺産をめぐる訴訟」というトピックについての考察の結果を示した。

⑥協力研究者マルティーヌ・リード氏を 2017 年 9 月に招へいし、リード氏は大阪府立大学、西南学院大学、信州大学でシンポジウム・講演をおこなった。翌 2018 年 12 月にもリード氏を招いて神戸大学で講演・討論会をおこなった。2017 年度招へいの成果の一部は氏の論文 Pain ou galette? Table et nourriture dans “Eugénie Grandet” として刊行された。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

フランス革命が文学作品に及ぼした影響に関してはフランス・日本をはじめ多くの国々で、様々な角度から研究されているが、19 世紀のフランス女性作家の作品研究において音楽と旅との関連からの考察は現在までほとんど試みられていない。申請者の平成 25－27 年度の研究とともに、19 世紀前半のヨーロッパにおけるツーリズムのロマン主義的心性とのかかわりについても本研究はユニークなものとなっている。今回の研究成果は、ロマン主義における音楽、旅、そして革命の関係について新しい知見を発表して一定のインパクトを与えることができた。

スタール夫人の著作の重要性はフランス文学研究者にとっての常識ではあっても、彼女の最初の長編小説『デルフィーヌ』や未完の回想録『追放 10 年』を本研究のような角度から検討したものはほとんどない。一方サンドに関しては、晩年の作品に見られる彼女の革命観へのパリ・コミューンの影響や、『歌姫コンシュエロ』および『ルードルシュタット伯爵夫人』とフォン・デア・トレンクの回想録との関係についての考察はいままでの日本のサンド研究ではなされなかったものであり、その意味で大変ユニークなものであるとされた。以上のような理由で、仏文関係の研究発表で申請者の論文が参考文献として引かれるなど、申請者の研究成果はわが国

において一定のインパクトを与えたと言える。研究協力者であるリード氏の仏語論文も、現在の日本の仏文学会で権威ある雑誌 LITTERA に掲載されて国際的に高い評価を得た。なお、本研究の成果としてあげた申請者の論文はすべて日本語であるが、その内容については日本ジョルジュ・サンド学会の HP にフランス語のレジュメを掲載しており、仏語圏の研究者にも周知されている。

(3)今後の展望

今後は平成 25－27 年度、平成 28－30 年度の基盤研究を継続して、音楽や旅によって呼び起こされるイマジネーションと現実世界の相互作用に関する研究を続ける予定である。申請者の研究の目的は、19 世紀フランスにおける大きな社会的・政治的潮流であるロマン主義の精神風土や価値観を再確認するとともに、そこにジェンダー的相違があるかどうか、すなわち男性作家にはあって女性作家にはない、あるいはその逆の何物かが存在するかどうかを、サンドやスタール夫人の作品を考察することによって明らかにすることである。さらに、副次的な目的として、彼女らの著作についての 19 世紀の読者と 21 世紀の読者の興味・関心点の相違、およびフランスと日本の読者のそれらの相違を考察することによって、このふたつの国における近代市民社会成立の歴史やその構造の違いについてジェンダー論的視点から一石を投じたい。

歴史的に見ると、ドイツからフランスに紹介され、1830 年代に最盛期を迎えたロマン主義は政治と深くかかわる社会的な運動であったが、同時に、物質世界の上位に非物質世界を措定するきわめて理想主義的な傾向、および宗教的なものと結びつきやすい傾向も持っていた。音楽などの芸術はその非物質的世界に向けた重要な扉のひとつであり、旅もまた非現実的・宗教的な世界への扉を開くイマジネーションを活性化させるのである。申請者の研究から得られる知見のうち、旅とイマジネーションとの関係、音楽と宗教との関係、土地・住民・音楽の結びつきに関する考察などは、音楽学、歴史学、観光学など、文学研究とは異なる分野にも新しい視座を提供できるものと期待している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①坂本千代、「ナリシキン邸のスタール夫人」、『近代』、査読なし、118 号、2018 年、pp.19-33、http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81011243

②坂本千代、「ジョルジュ・サンドの『ナノン』における旅と革命」、『国際文化学研究』、査読なし、49 号、2017 年、pp.51-66、http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81010039

③坂本千代、「サンド『ルードルシュタット伯爵夫人』における秘密結社とフランス革命」、『国際文化学研究』、査読なし、48 号、2017 年、pp.111-127、http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81009888

④坂本千代、「スタール夫人の『デルフィーヌ』について」、『近代』、査読なし、115 号、2016 年、pp.1-17、http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81009658

〔学会発表〕（計 2 件）

①坂本千代、「ジョルジュ・サンドにおける著名性―『我が生涯の記』と『旅人の手紙』」、公開シンポジウム「セレブリティの呪縛、2018 年

②坂本千代、「『コンシュエロ』『ルードルシュタット伯爵夫人』とフリードリヒ・フォン・デア・トレンク」、日本ジョルジュ・サンド学会、2017 年

〔その他〕

ホームページ　http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/sakamoto/2008/05/post.html

６．研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：リード　マルティーヌ

ローマ字氏名：REID, Martine

研究協力者氏名:高岡　尚子

ローマ字氏名：TAKAOKA, Naoko

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。